



月は出ているか？

「月が出ているってことはいいことよね？」

「ま、確かに月に叢雲、花に風っていうぐらいいからいいことなんだろうなあ。月とか花を良い対象として捉えて、世の中なかなかうまい具合にはことは運ばないっていうことわざになるくらいだから」

「うんうん、月はいいよねえ、まん丸でも半分でも三日月でも、いい形だよねえ」

「でもそれが人の心を惑わすっていう考えもある」

「なんで？ 月と言えば月餅、月見団子に月下美人、おいしそうだし珍しそう」

「月俵、月の輪熊に月下氷人、と言えば全然違うけど」

「なにそれ？ 月俵と月の輪熊はいいとして…」

「いいのか？」

「いいの！ 月下氷人でなに？ 月下といえば美人か棋士かって相場が決まっているのに、なお月華なら剣士だよ」

「全然そんな相場は知らない…なんにせよ、月下氷人とは仲人のこと」

「ふーん」

「ちなみに、氷人だけで仲人の意があるんだけど、月下老人という故事成語と相俟って月下氷人という言葉ができあがった」

「むむむ、どういう故事成語なのよ、月下の老人が仲人をしてくれたの？」

「つまりそれは月夜に出会った老人が将来の伴侶を予言した故事、氷人のほうは氷の上に立って氷の下に立っている人と喋った夢を見たんだけど、それはなにを意味するのかって占ってみたら、氷がとろける頃に結婚するってことでしょうと占い師が言ったっていう故事」

「なんか変」

「そりゃ夢だもん、夢が普通だったらうつつに生きる意味もない」

「はあ、で、夢はいいけど月は…もう月下氷人はいい」

「うん、月餅は中秋の月に、月見団子は秋の月にお供えて食べる」

「月餅は知らないけど、月見団子は十五夜だから15個供えるんだよねって、それって横から見たら15個ってこと？」

「確かに1+2+3+4+5はそうだけど、四方どこからでもそう

見えるようにしようとすると、 Σn^2 で55個にもなって大変」

「じゃ、どう積むの？」

「一例として、1, 2, 4, 8と積んで合計で15個」

「んん？ そんなん積めるの？ 2個の上に1個っていうのは物理的に無理なんじゃあ？」

「ガラスの玉を積むわけじゃないから物理的に全く問題ない。ちなみに団子はもともと里芋だろう。里芋の収穫祭から変化したから。だから団子の形も里芋状にしておくとなかなかいい」

「うう、芋名月ってやつね、でもやっぱり十五夜は月見団子じゃなき

や雰囲気でないよねえ」

「ま、太陰暦八月十五日と九月の十三日の晩に月見団子は供えるもんなんだけど、十三夜は豆名月、とか粟名月っていう」

「十三夜もそうなんだ。けどそれって月は満月じゃないね」

「十三ななつだもんな、だから十三夜よりも十五夜」

「ふーん、じゃ、月見蕎麦は？」

「見たまんま、黄身が満月、白身は雲。全然中秋の名月とは関係ないようだけど、月、と言えば満月であって、満月といえば中秋の名月だから、それでもいいのかなあ、今回はむつかしい」

「で？」

「でってなに？」

「だからそろそろ月に対するネガティブな意見を、と」

「聴きたい？」

「聴かせようとしていたくせに」

「ルナティックと言えば月に影響されたって意味だけど、それは転じて気のふれた、とかそういう状況にある人をさすなあ」

「つまり月に影響されると、おかしくなるのね？」

「月の霊気にあたると気がふれるという考え方があったからね、欧州ではそういう考えがかってあったためそのまま言葉に残っている」

「月の霊気？」

「例えば、あの青白い色合いとか、満ちて欠けてと移ろう様とか、あの月面の文様が人に無用の心配を起こさせる」

「うさぎさんがお餅をついてるやつ？」

「巨人だったり蟹だったり、女性の顔だったり国、地域によって見え方は様々」

「そのせいでヨーロッパでは月が嫌いなのかあ」

「ライカンスロープは満月で獣人になるねえ、狼男とか。でも狼男っていうのはある種のカビの生えた小麦で作ったパンを食べて精神に異常をきたした人らしいけど」

「憑き物っていうくらいだから」

「そのつきは全然違う。ま、東洋的には太陽の陰として、太陰としての月はもうその名前のありようからなんか厭な予感を抱かせるな、天照大神は有名だけど弟の月読尊はもうちょっとだしなあ」

「女神じゃないんだ？」

「確かにルナだと女神だが、こっちは男神」

「あ、じゃあ十五夜って月読尊を祀っているの？」

「だから秋の収穫祭だから、直接的に関係はないだろうねえ、でも日本で月の神さんっていったら月読尊だ。月を擬人化している際には月読男、つまり月読尊のことから転じた言い方するわけだし、そう思ってもいいんじゃないかな。月が主役なのはやっぱりこの時季だし、ってその前に団子ばかりじゃなくなってススキも用意しないといけない」

「うん、けど月が出ていないと始まらないよね？」

「こればかりは月に叢雲、花に風。なかなかいい具合に出てくれないのが秋の月。」

「出ない時は？」

「夢で見ましょう」

「あうう、変な夢になりそう」

おしまい

